

# 回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

## 欺瞞

店長のあの表情、言動から察するに、今回は店長の仕事ではなさそうだ。設定を知るもの、それは私を除くとK班長以外にはいない。Kがああ吉宗の若僧と繋がっているのは間違いない。私の休みの時だけに与えられる設定入魂という役割。その乱用は店長の信頼や会社を裏切る許されない行為。また、私の目をごまかそうとしたこと、ごまかせるだろうと思われたことが非常に気に入らない。まだ他の従業員は気づいていないが、ホールの流れやお客さんの個々の好みやスタイルを熟知しようとしてきた私には通用しない。ホールを見つめ続けてきた私だけが感じる「違和感」だ。日常生活においてもいつもと何か違う違和感を察した場合、「気のせいだろう」などと軽く考えてはいけない。「何かある」そう考えて追求するほうが賢明だ。何もなければそれでよいし、何かあった場合、その対応が可能となるからだ。私は昔からよく言われる「虫の知らせ」というものも同種の違和感として大切に扱っている。

Kよ、おまえは私の目を、ごまかそうとした。今度は私の番だ、おまえは私にごまかされない自信があるのか？

事務所内にある監視カメラによるホール映像。そこに映し出されている

## 偽計

K班長に私はそう問いかけていた。「策」の決行のためにわざと私の休みを早め、それは確実に遂行されようとしていた。そしていよいよ発動目前となる前日、店長と綿密に設定の打ち合わせが行われた。

「設定6がすぐ明確に分かる機種には6を使わないでください。出率(機械割)が高く、かつ比較的負けにくい機種に6を使って下さい。北斗あたりがよろしいかと思えます。」

「北斗にしか6がなかったら怪しくないか？」

「はい、なので6でも出さないなど評判がイマイちな台に6を使い、あとは4や5を使って下さい。」

「分かった。そして明後日は北斗を全面的に勧めるイベントにしよう」

「了解しました。では後は例の作戦通りに。」

次の日の閉店後、店長は打ち合わせ通りに設定を決め、それをK班長に入魂させたのである。これで準備は万端だ。明日、例の若僧が来店すればこの策は炸裂する。

休み明けの出動日(例の若僧が来店する予定日)、私にはこの策の最後の大役があった。いつもより1時間早く出動し、K班長が入魂した設定をすべて変更する役目である。他の従業員にも知られるわけにはいかないのです、み

## 信疑

従業員はいつものように開店準備を行い、いつものように開店となった。1番に入店したものは例の若僧ではなかったが、ソイツはやってきた。先頭集団にまぎれてやってきた。向かう先は予定通りの北斗である。疑いのない足取り、疑いのない台選び、ソイツは畏にかかったのだ。

問題は今からである。北斗は比較的高設定かどうかの判断は容易な機種だ。しかし確定的といえるほどの材料はない。打ち続けるうちに明らかに6の確率を下回る小役出現率とボーナス後の高確移行率がつくだろう。さらに両隣の好調ぶりにも目が行くだろう。そこから問題なのだ。ソイツはどういう行動をとるだろうか？ここに私が北斗をエサにした理由があるのだ。

2時間ほどが経過しその差が見え隠れしてきていた。若僧にまだ移動す

「ホール内に何か変わったことはなかったか？」

「いえ、特になにも」

「そうか、ではなぜ俺はお前を呼び出したのだ？」

「分かりません」

「それが分からんくらいだからダメなんだ。まあ、分かるやつならこんなことはしないだろうが。今日の設定は俺が入れたものだ、朝早くに出動し打ち変えた。」

「・・・」

「今から店長のところへ行き、詳細を話してこい。そして必ず謝るように。反省していることを的確に伝えなさい。」

「・・・」

K班長は黙って、事務所に入っていた。私もK班長に続いて事務所に入った。

そこにいた店長は怒鳴る様子もなく、意外と冷静な口ぶりだった。

「今までいくら横領した？」

「わかりません、振込みになってますので」

「わざわざ振込みか。まあいい、明日記帳して持って来い。今から本社に連れて行く」

「・・・」

「おいA、そういうことだから後は頼む」

「分かりました」

はたしてどういう結果になるのだろうか？クビ？降格？いや、それ以前に本人がココにはいたくないだろう。

また班長が一人いなくなるのか・・・

## 帰還

閉店近くに店長とK班長は帰ってきた。決定事項を店長から確認すると、それはかなり意外なものだった。この事件は従業員にも伝えられる。ということはお客さんにも伝わるだろう。みんなから白い目で見られるのは間違いないことだ。それでも辞めたくないと言いつつたらしいのだ。会社側もクビにすることはなく、降格だけで済ませる方針をとったようだ。もちろん通帳に振り込まれた部分は弁償となる。

「てっきり自主的に辞めると思っていました。意外です」

「働き口がないんじゃない？どーでもいいけどさ。ところでお前、Kに何か言っただろ」

「いえ、特に何も言っませんでしたよ？」

「いや、Kがな本社に向かう途中に俺に謝ったんだよ。自分から発言したことなどないヤツが自ら謝罪なんかできないだろ。これはお前の入れ知恵だな、と思っただろ」

「そうですか、きつと反省してたんでしようね。私はそう思います。」

◆次回予告◆

大罪を犯したK君。彼の通帳には思わぬ名前が記載されていた！この事件はまだ終わりではなかったのだ！次回「共犯」乞うご期待！

**A氏プロフィール**

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。



る気配はない。両隣の台も1台は空き台である。出玉は若僧のほうはもちろんのこと、隣の6の台もそれほど好調といった様子ではない。しかし台の移動をしないところを見ると、若僧の隣に座っているお客さんは多少なりとも6を感じ取っているに違いない。そして若僧も6をまだ確信しているだろう。

お昼が過ぎ、隣の6の台はその力を確実に発揮してきている。一方若僧の方も設定は1だがなかなか善戦している。出たり入ったりでそれほど負債は抱え込んでいないだろう。まだ台を移動する様子ではない。

午後3時が回り、店長が出動してきた。「どうなの？来た？」

「きましたよ。予定通りの行動でした。まだ頑張ってます」

「ヒヤハハ！普通なら6じゃないって分かるだろ！」

「分かります。しかし、設定を打ち込んだ人からの情報です。自分の経験より、そちらを信じているのでしょね」

「隣の6が片方空き台じゃないか、せつかくだからメールで発表してやろうか？」

「あの若僧はそれでも信じて今の台を打つと思いますが、それはやめておきましょう。K君の逃げ道を少しは残してあげないと。自分は確実にあの台を6にしたと、言えなくなりません。それからこの策は今日で終わりです。K君が来たら呼び出して問い詰めてください」

「え？またお前が休みのときにやればいいじゃないか？」

「いえ、それはできないのです。設定表には過去10日間の設定が出ます。私がパソコンに入力する設定はグラフではなく正規の方です。きつとK君は今日の設定を確認すると思います」

「あ、そうか、バレちゃうんだ。分かった、仕方ないけど今日だけにしよう。」

「それと、K君が出動したらとりあえず私から話しますので、暫くは黙っててもらえませんか？」

「わかった、そうしよう」

夕方5時前、K班長が出動してきた。朝礼を済ませたあと、K班長はホールの巡回を始めた。30分ほどが経過した後、休憩室に呼び出す。